



平成 25 年 10 月号

今月の断酒表彰

- N ・ T さん 南千里支部 断酒三ヶ月
 A ・ D さん 吹田支部 断酒六ヶ月
 O ・ H さん 吹田支部 断酒五年
 W ・ M さん 吹田支部 断酒十二年

断酒表彰おめでとうございます。ますますのご活躍を期待いたします。

断酒に思う(43) 「断酒会と地域活動」

(『かがり火』平成13年7月号掲載の「照射」についての解説：小林哲夫著『照射・解説』より抜粋)

前 略

断酒会の結成が始まったばかりのころは、行政も医療もアルコール中毒問題にまるで関心がなかった。精神科へ入院したアルコール中毒患者は、鉄格子のある部屋に閉じ込められただけで、治療らしい治療は受けられず、断酒会員が保健所を訪れても迷惑そうにするだけで、ろくに話を聞いてくれなかった。

しかし、地域の酒害者やその家族にとって、アルコール中毒は家庭崩壊につながる大問題であったので、断酒会の結成をマスコミや口コミで知った彼らは、断酒会の事務所や会員宅に必死の思いで連絡してきた。

また、連絡を受けた断酒会員は、まるで見知らぬ酒害者や家族に会うため、日夜を分かたず地域を駆けめぐっていた。こうした活動があつて初めて、アルコール中毒が回復する病気であることを、医療に先駆けて断酒会は実証したのである。

この事実刺激を受けて、昭和40年代の終わりから50年代へかけて、アルコール専門医療が誕生することとなったが、第一世代のアルコール専門医たちは断酒会の功績を高く評価し、「断酒会は地域精神保健活動の先駆者」とした。

やがて行政も断酒会に目を向けるようになり、厚生省は昭和55年、断酒会員による酒害相談員制度を導入することを、全都道府県精神衛生センターに勧告した。酒害相談員を各自治体から委嘱された断酒会員は、この制度の発足によって、保健婦と連携して地域での酒害相談を行うことになった。

断酒会規範第一項が、「断酒会は酒害者による酒害者のための自助集団であると同時に、市民活動団体である」とした理由はここにある。つまり、断酒会は断酒会員のためだけにあるのではなく、地域の見知らぬすべての酒害者のためにあるということである。

中 略

平成 25 年 10 月 1 日発行 128

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.com>

現在の断酒会の停滞の大きな原因の一つに、酒害相談の場が狭くなっていることがある。地域から直接相談を受ける機会が激減したこともあるが、それを理由に断酒会員が地域へ出掛けなくなったことが大きい。

今の断酒会員の中には、酒害相談とは入院中の患者に断酒の歓びを伝えることと、再飲酒した断酒会員を支えることである、と地域での活動を外して考えている者が非常に多い。

しかし、断酒会の原点にあった酒害相談活動とは、くどいようだが断酒会規範第一にある通り、地域のすべての酒害者とその家族を支える活動であった。そのことを思い起こし、地域活動の活性化を計れば、現状の断酒会の停滞は打破できるはずである。

後 略

「よりよい断酒生活を送るために」は、先月号で終了しました。今月号より、「指針と規範」の抜粋を再開させていただきます。 編集部

【今月の「指針と規範」】断酒新生指針 五 自分を改革する努力をし、新しい人生を創る

自分の欠点を捜すことはそんなに難しいものではない。自分を変えなければならぬと考えるだけで、自分の持っているいろいろな欠点が浮かび上がってくる。例会を通してすでに、それとなく気にしていたからである。今まで気になりながら認めたくなかったことを、素直に認めるということである。

それさえできれば、自分自身のこれまでと、これからの生き方に問題意識が持てるようになり、われわれの回復は生きていく限り続く。そしてある時点から、社会一般の人たちよりずっと洞察力が深まり、それを足がかりにしてあらゆる改善が進み、より豊かな人間性を持つようになる。

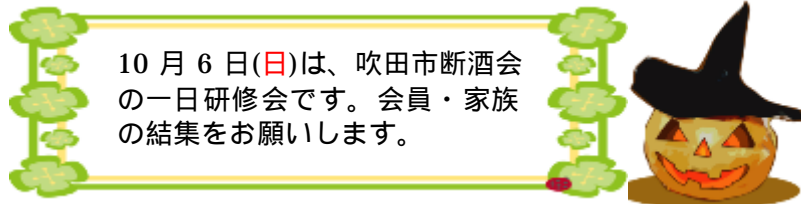
普通の病気が回復するということは、元の健康なからだになったときすべてが終る。しかし、アルコール依存症は一生かけて治さなくてはならない病気であり、からだだけでなく心の病んだ部分を治し、その上、人間としての成長が死ぬまで続く。

普通の病気が治って元通りになる状態をゼロと考えると、酒害者がアルコール依存症から回復する場合は、ゼロを通り越してプラス一にもプラス五にもなるということである。周囲の人たちに与えた苦痛を除いて考えれば、あるいは、恵まれた病気といえるかもしれないのである。

自己改革をすすめるために、自分自身を肯定的に捉えよう。酒に溺れ切った生き方そのものを否定しても、自分の人間性まで否定しないでほしい。自分が元々駄目な人間であり、そのせいで酒害者になったと考える人には、自分を改革する余地がないのである。

自分が酔っぱらってやった非人間的な行動は許せなくても、自分という人間そのものは許そう。自分を責めてばかりいる人は、自分のあら探しはできても、自己改革のためのエネルギーを持つことができないのである。

(指針と規範 P31 ~ P33)



10月6日(日)は、吹田市断酒会
の日研修会です。会員・家族
の結集をお願いします。

